

TVドラマ、アニメ、マンガなどに見られる歴史

河野孝之

●サブカルチャーという存在

与えられたテーマは「TVドラマ・アニメ・マンガなどに見られる歴史」であるが、まず特集のメインテーマ「サブカルチャーとしての歴史」のサブカルチャーについての私見から語り始めたい。

個人的にはサブカルチャーは、すでに死語ではないかと思っている。

サブとは、英語の低位・補助的という意味でメインカルチャーに対応する言葉で、社会の中心的かつ支配的な文化の下に位置するものを指していた。クラシック音楽、古典芸能、美術、映画、純文学に対してのポップミュージック、テレビ、大衆文学、漫画、アニメーションに加えて近年では電子ゲームなどがサブカルチャーと称されている。つまり若者、子ども文化といいかえてもいいものだった。だが、今や国策として経済産業省がクール・ジャパンとしてマンガ、アニメを中心とするサブカルを奨励し、メイ

ンカルチャー類の古典芸能などもポップな装いをほどこしてサブカル仕様としてしか世界に発信されなくなっている。だが、こういった「正」が「俗」に取って変わる、包含されてしまうというのは、歴史上、何度も繰り返されていることだ。

中国においては、歴代王朝の歴史を綴った「正史」があり、そのメインの正史をもとにサブである英雄群像物語である『三国志通俗演義』（通称『三国志演義』）が生まれた。この『三国志演義』も最初は一般民衆に向けての講談という語りものの形態から民間芸能、演劇という形態を経て、文字に書き残されて絵入り物語から「文学」となることにより知識人のものとなり、ハイカルチャーに属することでメインカルチャーになったといえるのだ。

この推移は、端的にいえば今回のテーマ「サブカルチャーとしての歴史」そのものともいえるかもしれない。晋代（一〇世紀）に陳寿による『三国志』や宋代（一〇